

探訪記

推葉・人吉の歴史と

文化をたずねて

休生所文化財調査委員

会員 古藤 田 太

(一) はじめに

去る八月末、休生所文化財調査員のメンバー四人は、はるばる推葉の郷を訪れた。

かつて推葉ダム建設当時、観光客がドツと押し寄せた時分に較べると、まるで火の消えたようなさびしい所になっていて、全く活気がないのに驚いた。さびしいのが推葉本来の姿かも知れない。

鶴富屋敷や、杉の大木を觀て、地圖を頼りに推葉山を越えて、人吉市に行くことにした。道路は舗装のしてない所が多い。また被損して目下工事のところも四、五か所もあった。

ここを通る車はヤわめて稀である。道の真中で食事をしてゐる向もあつた。工藤・小野両氏の確かな運転で、眼のまわる程多くのカーブを曲って降ってゆくと、何処までも推葉村が続いた。

地圖を見ると私達が熊本県に入った辺りは、五家荘・五木の里は、謂わば窪ちがいと云つたところだ、私達は九州の秘境の一部を通つたことになる。(下回参照)

(二) 人吉の神社

楚々たる王宮神社に寄つてみると、草葺きの楼門が熊



雨にさらされた姿が痛々しい。

城泉寺を探して行つて見ると、早も無住の寺である。草葺きの阿弥陀堂か、広い敷地にゆつたりと建てられて、その気品のある堂宇には見とれる程である。残念なことには板場に連絡がとれてなくて、内部の見学が出来なかつた。この阿弥陀堂は本来、淨心寺阿弥陀堂と呼んでいらしい。龍が伏していることから何軒の間には城泉寺阿弥陀堂と変わったということである。

六坊伽藍をもつ淨心寺は、寛喜二年(一一三九)に創立され、本尊阿弥陀如来と脇侍觀音・勢至の兩菩薩が、堂内に安置されているとのことである。

境内には石塔類も多く、中でも九重の塔、七重の塔(現在四重)が残っているが、鎌倉時代の作で、塔身の全部に弥陀仏の彫彫が施されてあつたが、中には少しの損傷もないような、美しい弥陀像のあるのを私は見た。

ここにはこの外、十三重の塔があつたのを、八代市に移したということである。阿弥陀堂や仏像また九重の塔は、何れも古くからの國の重要文化財である。

宿から近い青井阿蘇神社に参拝する。相良氏の尊厳をうけた神社だけあってまことに立派で、本殿(銅板葺)を除いてあと草葺きであるが、かえつてこの神社の歴史の古さを偲ばすものがある。現在の建物は、慶長十五年(一六〇八)相良頼房の時下再建されたものである。

街の向こうに、球磨川を隔てて人吉城跡が見える。森蔭の下に、苔むした石垣がキチンと一た線を見せて、長々とひびいている。広大なお城であったことがうかがえる。小野菜治氏の説明によると、中世と近世の同居型のお城といふことで、後程城跡を歩いてこのことが解いた。天主閣が普通おかれる辺り、石垣も無く、勝るお城の、全く中世の城であるようだ。相良氏の歴史の古さを物語る城跡である。

(三) 中世の相良氏

相良氏が、人吉の地多良木に下向したの故、建久四年(一二九四)のことである。

昔事蹟によれば

相良頼景が、平家に属して源氏に協力せしむるに、必ありと云ふから、頼朝はその地位が安定すると、頼景をこの地に左遷したのである。頼景は、建久九年(一二九八)人吉庄の地頭に補任された。長頼は地頭として、最初から人吉庄の全城を支配したのではなかつたが、寛元二年(一二四四)頃に変わると相良氏は、人吉庄を折衝して支配することになった。南北朝の争乱を契機として、球磨郡全城に相良氏の勢力が浸透して支配することになったのである。

聖後の大友義長は、肥後経略のため、衰微した菊池家に子息菊池師也をおくりこむ計画を構えていた。大友義長に代替りすると、永正十五年(一五二八)頃、菊池師也をして菊池家を相続させることに成功した。この菊池師也が成長して、菊池義武(義宗)重治(重昭)等多くの名があることになってみると、大友氏の計画のようにはゆかぬか

大友氏の系累は、大乗院宗心という策謀家について、義隆(前半)は、この人にかきまわされた。宗心は、大内氏と通謀して、大友氏入宗家を奪わんとする計画をもつて、次に大事件を惹起して、反義隆の旗幟を挙げたが、菊池義武は大友義隆に叛き、宗心の党派に加担した。相良礼城主佐伯惟治は、この菊池義武に通謀して活躍したと考えられている。相良礼合戦は、このようなことからおこったものであると信ずる。

この菊池義武の妻は、相良氏第十三代長毎の娘である。天文二十三年(一五五四)義武が竹田城原の空泉庵で殺された後、安永三十年(一七五九)義武は五十一才で死した以上、久きにわたって、大友宗家に楯つき通じたが、勢威地に墜ちた後半生は、概ね相良氏の庇護を享けたようである。

私達は、このような因縁から、相良の地を訪れることかできたのである。今、大友相良氏の墓地をたずね、感無量なるものを覚ゆる。相良氏墓地は熊本県指定文化財。

この墓地の何処かに、菊池義武夫人の墓があるか、と知れない。私は内心を挫き探し求めたのである。勿論にわかにそれは望むべきでない。薄幸の八義武の墓は、城原の空泉庵にある。法名「全主宗閣」ハセシヤイソウギンと刻まれて建てられたものである。

また、相良氏の墓地は、古い歴史が流れを物語る。百基を起する五輪塔群が、整然と並ぶ。有様は全く壯観である。それにしても、この墓地には暗さがない。と、く、権勢の家は、ありがちな墓の群が、挫折の暗さを漂わていない。地頭として、この地に落ちつき、ゆかて球磨郡を支配し、名和氏入代や、権葉山、米良山を管轄して、大友

地城をその支配下においた。あの困難な戦国の下剋上の風潮の中におつて、島津氏に頭を押しえられながら、明治維新まで命脈を保つことができた、その潜在力は驚くべきものがある。「鎌倉から明治まで」、島津氏と並んで、日本でも稀有な家系と謂わねばならない。

(四) 洞然居士状

中世の相良氏について、忘れてならないことがある。室町時代の相良氏の活躍を示すものに洞然状がある。洞然は、第十七代相良時広の外祖父にあたる上村長国の法号であるが、天文五年(一五五六)晴広の落討に志せて、相良氏歴代の武功、八代方面の支配、領主の修養などについて答申したものである。「洞然長状」とも「洞然居士状」とも謂われる。

(五) 浄土真宗の禁制

本項は、相良氏特有(進任では)なことをなかりで紹介することとする。

真宗禁制の始期は不明であるが、明応年間(一四九二—一五〇二)頃からではあるまいか。時代は下るが、享保九年(一七二五)相良長在の禁制の中に「切支丹宗門並ニ一向宗のこと」とあるのが見える。

天保以降の藩であるが、人吉藩の寺院数は一一〇か寺その内訳は、禪宗六四、真言宗三九、浄土宗七。当時既に藩では、真宗四五、禪宗一七五、天台宗一一一、浄土宗六五、日蓮宗六〇、真言宗一七、時宗二、となつてゐる。

相良氏は昔から、真宗という宗派を禁制にしている。禁制幾百年の間、隣郡諸々を本願寺派から、危険をおか

して秘密伝道を試みた奇情の僧も多かったと思われ、中でも能登高僧伝中の人々を挙げると、

「寛政緒方の人で、明応七年(一四九八)石山で蓮如に謁し、永正七年(一五二〇)には、山科に東如上人を訪ね、堂後に帯つた後は、武蔵守有重を改めて、藤徳と号した。豊・肥の間に真宗を弘め、大永元年(一五三三)東如上人より「長嶺山順正の寺号をいただき、寛政緒方郷に一字を創設し、天文十二年(一五四三)熊本に移り、豊後より甲斐山中や八代葦北へ往來、その後薩摩・球磨の間に真宗を布教した。」

ここに人吉には、仏飯講という組織があつて秘密裡に活動し、真宗信者は自分の志願金と山科の本山に上納した。この仏飯講を組織したのが山田村の伝助という者で、これは本山にも赴いていたといふ。ところが遂にこの仏飯講が露頭して、天明二年(一七八二)伝助は刑場の露と消えた。

伝助の死後六十四年の間、仏飯講は解散してはいたが、弘化三年(一八四六)阿蘇郡草場村正光寺住職一行師が、聚登に來て布教したために、仏飯講も秘かに再興されたといへられる。

このように真宗の布教は人吉地方においては困難を極めたもので、明治維新になると、禁圧の長い時代の反動として、我もわれもと真宗の信者となり、次々に布教所ができて、在態状態を呈したと伝えられている。

(六) 農民の生活

この項は、依伯藩と似通った点が多いので、参考までに紹介することとする。人吉藩に、教令というものがあつた。幕府の巡見使の下向

にやなえて、おらかじめ回答をこしらえたものである。延享三年（一七四六）の教令によつて、貢租について述べると、個人の貢租額は普通通告された。納期は、早稲は八月、中稲九月、そして晚稲は十月である。漆のあるものは漆を、茶をよつものは茶を、茶園を多く有する者は、米一俵（三斗）の代りに、下々茶七十斤を納めさせた。貢租の口米として、一石につき人吉までの運送料二升六合、夫米（藩斤儲人料）として一升五合、春草代米として二合、計四升三合が徴収された。

凶作に備えて五百石の田米が城庫に備蓄され、食料其他に困る者のために、銀米・品物米という融通法が設けられていた。

天保元年（一八三〇）頃までの農民の生活は、家板壁、戸板ばかりで障子は無かった。私達も、町の重要文化財に指定されている、元相良藩の上級武士で、後河津藩を治めた太田家を見学した。茅葺きの面白い屋根続きの家へ奇抜造りで、屋根と二分折り曲げ大曲屋風の外観で、質保存がよく、修繕資料として貴重なものではあるが、戸板ばかりで薄暗い。

衣料は、棉を作つて糸をつむぎ、木綿を織つて、浣黄か空色に染めて使用した。其の他の染色は他藩も禁止していたようだ。

膳部はすべて木地屋敷、茶碗は土焼茶碗、ちよく、ちよかは無かった。

外出時の灯りは松明で、提灯も無かった。掛はあったが秤は無かった。候って、茶も一升いくらで売買した。貯金は無論なかつた。ちよつとした凶作にも餓死に近状態に陥る。葛根掘り、推の実拾い、さらに乞食に転落することによつて、辛うじて露命をつないだ。

相良頼徳は、文化四年（一八〇七）の禁制（農民に閉する

もの）に極めて少ない）の中に、「百姓の住宅は五疊以下で掘立小屋であることが定法」
「藩士に対する作法としては、笠・頭巾・手拭をとり、下駄・木履を脱ぎ、礼儀を整えて、道の片隅を通行すること」としてゐる。

人吉藩は広いが、惑まれた藩という訳ではない。元禄九年（一六九六）から文化元年（一八〇四）に至る百八十年間に四十回凶作があり、飢饉とまわつてゐる。わが佐伯藩でも宝永二年（一七〇五）から文化六年（一八〇九）までの百五十年間に集中的に凶作が起り、飢饉も起つてゐる。（佐伯市史）
凶作の集中は注目する必要がある。

人吉藩に於いて、球磨川の開きくや、水路が築造されたことは、佐伯藩の場合と酷似するよう思われる。球磨川の開きくは、人吉と八代間の水運を開く目的で、人吉町の町人林正盛が、寛文二年（一六六二）から四十年の歳月を費して、しかも独力・自費でなし遂げた偉業である。水路としての百太郎藩は、延長四里十九町で、農民自身の手で、長い年月を要して、宝永二年（一七〇五）完工したものである。幸野藩は、藩命をうけた高橋政重が、宝永二年（一七〇五）に完成したもので、この二つの藩を合計灌漑面積は三、五六七町歩で、一九四七年の球磨郡の水田面積七、六五一町歩の三四％に相当する。

日への通りすがりに見た秘境椎葉山・米良山日、宝永六年の相良藩教令では、その人口推葉山四、四〇〇人、米良山三、一九三人である。この辺境の支配だけで多大なことをあつた。これらの秘境から流れる球磨川のように、長い生命力を持つた相良氏、相良藩には非凡な魅力と愛するものがある。